

研究所統一テーマ

研究所の将来計画検討委員会では、平成10(1998)年度から、統一テーマとして「アトピー性皮膚炎」を取り上げ各部門が協力して研究することを決めた。また平成14(2002)年度から「東西薬物併用効果の科学的解析」を共同して研究することにした。

統一テーマの研究資源(人,物,金)は原則として各部門で負担し,さらに所長のリーダーシップ経費および,学長裁量経費「教育研究学内特別経費」に応募し補充している。

1. アトピー性皮膚炎の研究：

「アトピー性皮膚炎」の研究は,臨床的に使用されている漢方方剤に薬理化学的な evidence を付与するとともに,和漢薬研究所オリジナルの新処方を考案することを目指している。平成10(1998)年度から病態生化学部門で確立されたIgE介在性の3相性皮膚反応モデル(Tahara E., et al.: *Allergology International*, **48**: 265-273, 1999)を用いて,細胞資源工学部門(現・薬物代謝工学),化学応用部門,資源開発部門(現・漢方薬学)の4部門で研究に着手した。平成12(2000)年度から臨床利用部門が脂質性ケミカルメディエーター(PAF)の産生抑制作用を指標にした研究を開始した。以下に2002年の活動状況を収録する。

1) 原著：

1. Tatsumi T., Terasawa M., Tega E., Hayakawa Y., Terasawa K., and Saiki I.: Immunopharmacological properties of Oren-gedoku-to (a Kampo medicine, Huang-Lian-Jie-Du-Tang) on contact hypersensitivity reaction in mice. *J. Trad. Med.*, **19**: 21-27, 2002.

2) 総説：

1. 済木育夫：アレルギー性皮膚疾患に用いられる漢方方剤。アレルギー・免疫, **9**: 790-799, 2002.
2. 済木育夫：漢方方剤のアレルギー性皮膚疾患治療への応用—基礎からの提言—。日本小児東洋医学会誌, **18**: 21-26, 2002.

3) 学会報告：

1. 済木育夫：(シンポジウム)アレルギー疾患に用いられる漢方方剤の基礎的研究。第21回漢方免疫アレルギー研究会学術集会。2002. 1. 26. 東京
2. 済木育夫：アレルギー疾患に用いられる漢方薬の基礎的研究。皮膚科漢方入門セミナー。2002. 3. 17. 富山
3. 間嶋孝美, 手賀栄治, 櫻井宏明, 済木育夫, 谿 忠人：IgE介在性3相性皮膚反応を指標にした炙甘草と甘草の比較。第19回和漢医薬学会大会。2002. 8. 31. 千葉。(若手研究者奨励賞を受賞)

2. 東西薬物併用効果の科学的解析：

平成14年度から,新たな研究所統一テーマとして「東西薬物併用効果の科学的解析」を立ち上げた(世話人:服部征雄所長)。その特徴と狙いは,漢方製剤を主体にして,個の医療を目指した薬物反応性の解析や,薬物相互作用研究を推進することにある。

漢方製剤は西洋薬剤と併用されて多くの臨床実績をあげてきたが,併用療法を支持する研究や,併用の問題点を回避する対策を提案する基礎研究は立ち後れている。そこで和漢薬研究所の各部門の叡智を出し合って,漢方製剤と使用薬剤との併用療法を推進し新たな併用法を提案できる研究を行う予定である。

このテーマは全部門が参画している。その成果に関しては2003年の年報にまとめて記録する。

以上(文責:漢方薬学部門・谿)